
短編集

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Zマーク】

Z3303Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ジャンルも方向性もバラバラなどを無造作に詰め込んでいく予定。モバゲーやってた頃に公開していた作品もあります。

馬鹿だつたり病んでたり意味わからんかつたり。

たまに著作権放棄のお題をお借りして好き勝手やってるかもしれません。

アラカルト（通常料金）

阿味ですか。

“それ”は闇の中で虚空を見つめていた。そうして時たま、通り過ぎる人々を恨みの籠もった瞳で睨みつけては暗闇で蠢いていた。

父を、殺された。次に母を、そして妹。果てには手に手を取り合つてようやつと共に逃げ延びてきた弟までもが、その凶刃にかかり、尊い命を奪われた。

おれたちがいったい、何をした！

……そう、叫び出したい気持ちだった。が、少しでも目立つような行動を取れば己も殺されてしまう。“それ”はぐっと堪えた。

だが、悔しい。

おれたちがいったい、何をした……？

其処に在るというだけで嫌われ、蔑まれ、命を奪われる。こんなにも不条理なことが、果たしてあって良いのだろうか。

取るのだ。

復讐、してやる。

そう、そうだ。復讐、復讐だ。復讐してやるのだ。家族の、仇を

“それ”は駆けた。疾風の如く素早く駆けた。

「 もやああああー。」

絹を裂くよつた女の悲鳴。手には、禍々しい凶器。

またアレかーーー。

必死に逃れようとするも、時既に遅し。あの悪夢が、再び襲ひ。徐々に動かなくなる手足。霞む視界。己の情けなさと、涙が出る。此処まで、か。

ああ、父上、母上、年端もいかぬ妹よ。最期まで「己」の身では無く、おれの身を案じた弟よ。仇はとれませんでした。
もうすぐおれも、其方へ逝きます。

「 もやだあー、エーハイの家で『キブリ』がこんなに出るわけ

ーー?」

かのじょ たいよつ

この夏が終われば、きっと私の命は枯れ果てるのだわ。
張りのあるこの肌はしみだらけになつてしまわくちゃの老婆のよう
になるのだわ。

白髪の美しいこの黄金の髪は抜け落ちていくのだわ。

嫌。嫌よ、そんなの絶対に嫌だわ。

ああ、夏の太陽よ。燐々と私に降り注ぎなさい！
もつと！ もつとよ！
もつともつと光をちょうだい！ もつと私を輝かせて！
そうよ。そうすれば、きっと私は一日でも長く彼の前で美しく咲
き誇ることが出来るのだわ！

ああ、ねえ、愛しい貴方。もつと私を見てちょうだいよ。そうす
れば、もつともつと、私、うんと美しく咲いてみせるわ。
この命を、咲かせてみせるわ。

ねえ、私を見て。

(待つて、私から目を逸らしちゃ嫌!)

(ずっと私を見ていて?)

(そうすれば、太陽なんかよりも優しい光で貴方を包んであげるわ)

学校つぽこ単語で。

学校つぽこ単語で。

学校も詫問せねば

“おまめいわ”

「おはよつ體罰共ー」

「え……、なにお前。殺されてーの?」

「お前、ひよりと金持ちだからって調子のんなよなー……へやつ、羨ましいー!」

「ふはははは! 所詮庶民には到達する」との出来ない場所にぼく

はこるのだよ! わあ、崇め、称え、いだつ! ?

「ふあああつ。……あれー……、おれ、なんか踏んだー……?」

「「グッジコーブ! .」」

殺意にみなぎつてゐる奴
村井 むらい

羨ましがつてゐる奴
赤城 あかぎ

金持ちな奴
おくのみや

奥乃富

踏んだ奴
ふみだ奴

嵯峨崎

“遅刻”

「セニセー、おせよハジマコモーす」

「はいはい、おせよハジマコム。市田、今は風だ。確實に早い時
間じゃない」

「あらりー……。遅刻しました。」めんねーい

「素直であります。で? 遅れた理由は?」

「川で溺れてるお婆さん眺めてたら遅刻しましたー」

「助けるよ。誤魔化すための嘘にしてもそれは酷いだらう。先生は
お前をそんな子に育てた覚えはありません」

「こつちやんもせんせーに育てられた覚えはありますーん」

市田 遅れた奴

中 担任のせんせー

“迷子”

「あいつ、おっせーなあ……」

「そろそろ行かなきゃいけない時間なんだぞね……」

「せつかぐの修学旅行があいつのせいでお無しになるなんて、誠に遺憾である」

「『立腹だね』……、椿さんば」

「すいませーん！ 道に迷いましたー！」

「遅いぞ、内山一。お前のせいでの椿がキレイで先生はガクブルだった。
罰として其処にある噴水の周りを五十周」

「ええ！？ なんなんだその体育会系のノリ！」

「お前が迷つたのは道ではない。人生である」

「相変わらず椿は俺に酷い！」

困つてた奴
樋田

椿
キレイた奴

迷つてた奴
内山

“居眠り”

「はい、じゃあ、」の問題を嵯峨崎一、解けー

「せんせー、嵯峨崎は今ぐつすりおねんねタイムでーす」

「よーし、市田一、叩き起こせー」

「いやでーす。いつちやんの手が腫れちゃうだしじょう

「嵯峨崎つてそんな石頭だつたつけか？」

「嵯峨崎、起きあひ。先生はお前のせいにで酷く困つておられる

「ううへん……、おれ、なんだかとても眠いんだパトラッショ」

「誰がパトラッショか。殺されたいのか貴様」

「ぬあつ?」

「だいたい眠いとか嵯峨崎寝て……、うわあ……、やけめでやるつ
?」

「椿一、お前のその心遣い、先生はとっても嬉しい。でもな、先生、
蹴り起こせとは言つてない。脳天に踵落としするなんて嵯峨崎を殺
す気か。椿はもうひょつと既に優しくしてやうつなー

「酷く足が痛む。何故だ」

「嵯峨崎の頭は椿の踵落としに打ち勝つたのか

「誰かおれに消しゴム投げただろう。おれの眠りを妨げる者は何人たりとも赦さない」

「嵯峨崎お前頭可笑しいんじゃないのか」

嵯峨崎の頭は椿の踵落としの威力をものともしない。

人物紹介とか載せてたけど嵯峨崎と椿だけ覚えとけば問題ないと思う。

“授業妨害”

「えー、じゃあ、この式に当て嵌まる公式はなんでしょう。はい、
嵯峨崎

「先生、嵯峨崎また寝てるぜ」

「よーし、村井、叩き起こせ」

「無理だつて。先生、ここにつきて何かの病気なんだ」

「仕方ない。じゃあ、秋澤、わかるか」

「先生！ 秋澤は手鏡に映る自分に夢中ですー。」

「よーし、内山。その手鏡叩き割つてくれ」

「俺じや無理だ！ 嶋峨崎の頭に任せましょー。えいっ」

「ほ、本当に割れた……。嶋峨崎くん、大丈夫かな……」

「微動だにしねーな」

「ここつ、実は寝てるんじゃないで死んでるんじゃないのか」

「あああああーー なんてことすんだよ内山ーー。」

「だつて先生が叩き割れつて」

「嵯峨崎もだが、秋澤、お前はいつたい何のために学校来てんだ？」

「勿論美しいオレを愛るために決まってんじゃないスかー。勉学に励むオレヤバくね？ マジばねえ」

「……は、勵んでないと思つ……。つあ、『』『』めんなさこつ……」

「秋澤、お前帰れ」

心配してた奴

鳥越

ナルシード奴

秋澤

“抜き打ち”

「この間やつた抜き打ちテストのことだけどな、正直、ほんつと最悪だった」

「いきなり抜き打ちとかやるせんせーが最悪だと思ったー」

「市田、お前廊下に立つか？」

「冗談でーす」

「で、話を戻すが……、なんだ平均点30点って。舐めてんのか

「先生ぺろぺろしたって不味いだけだろ?」

「内山、お前そろそろ本気でどうぞ」

「私は先生ならぺらぺらできる」

「椿、正気に戻れ。それでもた話を戻すが、このクラスでまともな点を取れたのは鳥越と椿と真崎、この三人しかいない」

「へー、真崎もか。すげーな」

「えつ？ 滅茶苦茶簡単だつたよ。ねえ、鳥越さん」

「えつ……、う、うん。簡単だつた」

「あの程度で難問とは笑わせる」

「お前らちよつと殴りさせて」

「というかな、大体可笑しいだろ。なんでテストを開始した直後に過半数の奴が机に伏せるんだよ。少しは努力しろ。嵯峨崎に至っては名前すら書いていない。真っ白な回答用紙が手元に届いたときは先生、目が飛び出るかと思った」

「な、名前書いてないのに、わかつたんですか……？」

「名前を書く欄に、“眠い”って書いてあつた。記入してあつたのはそこだけだった」

秀才そ^うな奴
真崎^{まさき}

“居眠り 2”

「 で、この公式を此処に当て嵌めて……、」

「 $x = 2$ 、 $y = 4$ 。これを代入すると……」

「 といふことだ。つまり……」

「 であるからして、このよつて証明出来るわけだな。

えー……、

「 ……そろそろお前、起れや」

クラス全員でハイパーおねんねタイム

“授業妨害 2”

「少しよろしいですか、田中先生」

「鬼頭先生、よろしいですけどいつたい何処から入ってきてんだア
ンタ」

「え？ やだなあ、窓からに決まってるでしょう？ 見てたじやないですか」

「そんな爽やかな笑顔で言われても。此処が何階だかご存知ですか
？」

「四階ですよ？」

「ですよねー？」

「そんなことより前の時間でこの教室に教材を置き忘れてしまって……、あ、あつたあつた。早く理科室に戻らなくつちや」

「どうして鬼頭せんせー一階にある理科室からわざわざ校舎の壁を壊つてこの教室に来たんだねー」

「ちょっとしたチャレンジです」

「今すぐ捨てる。その無駄なチャレンジ精神を」

チャレンジヤーなせんせー
鬼頭きとう

“図書室”

「あ、あのつ……、赤城くん、図書室は飲食禁止で……」

「えー、別に良いじゃんか鳥越ー。腹減ったんだもん。仕方ないだろー」

「で、でも……、」

「あ、やべっ。」「一ラ溢した」

「……ツー！ テメエええええええ……そこに直れええええええ
ー！」

「ええええええー！？」

「図書室は飲食禁止だつてんだらうが！！ その汚れた本を修復するのにいつたいどれくらいの時間がかかると思つてやがる！！！
一田だ…………！」

「た、たつた一田じゃんか！」

「やー一田でどれくらいの本が整理出来るんだろうなあー？」

「へ……つー

「誠心誠意土下座しろーーー 二回まわってワンと言えええええー！

！ーーー！」

「ハハハ……。（ぐおぐおぐお）…………わんつ

「あれ、椿、鳥越に姉か妹なんていったつけか？」

「いや、あれは鳥越です」

「鳥越は一重人格なのか」

いつも内気な鳥越さんは本当に命かけてる

“説教”

「いや～、相変わらず田中先生の請け持つ椿と鳥越と真崎の三人は
とても優秀な生徒ですね」

「はは、有難う御座います」

「これも偏に田中先生の教育の賜物でしょうなー」

「いえいえ、そんなことは……、」

「ですが……、その他の生徒の成績が少し……」

「…………」

「三ヶ月待ちまじょう。その間に彼らの成績を上がることができなければ、クビも覚悟して下さーいね」

「マジでか……」

果たして校長に教員をクビに出来る権限があるのか。

信じる者は巣食われる

「ああ、可哀想に」

そう呟くと、声は届いてしまつていたらしい。彼女は恐る恐る俺を見上げた。

大きな大きな飴色の瞳。極上の蜂蜜みたいな、日本人にはあまり見ない綺麗な綺麗な髪。嗚咽を漏らす度に震える肩を慰めるように撫でるそれは美しい。

「だ、れ……」

「さあ、誰でしょう。誰であつてほしい?」

「……」

はくはくと何かを言いたげに口を動かし、そして閉ざしてしまつた。とりあえず何も言わず、待つてみる。

こんな人気の無い冷たい廊下に一人座り込んでいるのは、桐山京。数ヶ月前までこの学園のアイドルだった女の子だ。

珍しい時期に転入してきた彼女は、学園の中でも人気のある男子生徒から溺愛されていた。しかし、それでも女子たちからの嫉妬を買つことはなく、誰からも愛された女だつた。

……そう、数か月前までは。

今はもう、誰にも見向きもされない可哀想な女の子だ。

桐山の人気が落ち始める数か月前、“彼女”はやってきた。望月有沙。

桐山に負けず劣らずのとびっきりの美人だ。桐山のふわふわな髪とは違つて、黒髪の真っ直ぐなロングストレート。目は赤。何処か冷たい印象を抱かせる、和風美女。彼女の手によつて、桐山は陥れられた。

俺はよく知らないが、桐山は裏では結構あくびこことをやつていたんだとか。

人気のある男子たちを身体で誘惑した。嫉妬で虐められないように男子たちの私物を女子たちに流していた。事実、男子たちの私物は度々無くなることがあつたらしい。

あれよあれよという間に桐山の味方はいなくなり、今では皆が望月の配下にある。望月宗教でも作りそうな勢いだ。

と、まあ、話を戻して。

彼女　　桐山がこんなところにいる理由は簡単だ。誰かに見つからない為。虐められない為。

が、その努力も空しく、結局見つかってしまつたらしく、制服はぼろぼろになつてゐる。

「誰で、あつてほしい？」

もう一度訊ねた。

すると、彼女は小さく、けれどはつきりとした声で言つた。

「わたしの、敵じゃ、ない人」

「そう、じゃあ、味方になつてやるつか」

「……ほんとう?」

期待の眼差しが突き刺さる。

さあ、俺は本当かどうかも何も言わない。好きに思へなさい。さあ、俺はどうちだらうね。

敵と判断しても良いけれど、お前にそれほどの余裕は無いだろ? う。

甘く微笑んで抱き締めてやれば、すぐに背に細い手が回った。

信じる者は巣食われる（後書き）

逆ハーツて御存知ですか？逆ハーレムの略称で、まあハーレムの逆ですよ。

逆ハーブ正って御存知ですか？まあ、男共の好意を無理矢理その補正のかかっている女の子に向けるものですよ。勿論、あんまり良いものじゃありません。大抵は途中で解けてそのまま補正のかかっていた女の子は嫌われます。

傍観ものではもう王道ですね。傍観つていう非王道の中の王道。

で、逆ハーブ正あるんなら、傍観補正があつたって良いんですね？って話。

もしかしたら続きを書くかもしれないけど、現時点ではそんな気力は全く起きないので一話完結に。

訴えて良いですか（前書き）

ギャグが書きたかっただけのもの。でもギャグになつてない。
台詞無駄に多い。

相変わらずの残念な文章。しかも何年か前に書いたものだからそれに拍車がかかってる。

モバで公開してました。捨てるのも勿体無いし、出しちゃおつかなつて。

無駄な勿体無い精神ですね。

一話完結。

読んで良いですか

「此方、A部隊！　ただいま、お嬢の家に到着！」　どうぞ！」

「此方、B部隊！　ただいま、お嬢の家の玄関に侵入成功！　どうぞ！」

「一人一役でくだらないことするのやめてもらえますか」

「あづあつーー 熱ツううううーーーー?」

いつのまにか私の家に侵入していた不審者をちょうど沸かしてい
たお湯で撃退した。モーニングコーヒーは飲めなくなってしまった
けれど、変態を撲滅出来たと考えればどうしたことない。

「何なんだお嬢！！」

「私、ヤクザの娘でもなんでも無いんですから、いいかげん“お嬢”って呼ぶのやめてもらえますか」

「やつだなー、お嬢つたらー！」の照れ屋さんつー

「死んでくれますか」

「それが何か」

「あれええええ！？ お嬢！？ 色々問題あるよ！？ せめて疑問文にしてええええ！？」

「それが何か？」

「それじゃなべて……」

私は鳩尾あたりで力を籠めていた足を退かし、自室へ戻った。鞄の中身を見て、忘れ物が無いか確認してから肩から下げる。何故か変態がついてきていたけど、無視して階段を駆け降りる。「ええっ！？」お嬢！？「ちよつとおおおおーー！」私は何も聞いていない。靴を履き、振り向いて言った。

「好い加減、ストーカー容疑で訴えますよ、伏野心さん」
やしん

「お嬢のストーカーならぬり」んでーー。」

「そうですか。……あ、もしもし、警察の方ですか。最近、ストーカー、」

私の名前は石谷いしゃく す。

彼我ひが

最近、ストーカー被害に悩まされていま

訴えて良いですか（後書き）

不審者との被害者のお話。

馬鹿しても良いですか

「おはよつ石谷… もう、今日こそ答えを出してもらおうか…!
俺の妻となるか! 答えは『YES』か『NO』だ!!」

「わかりました、くたばって下さい」

「いや、違くて、」

「わかりました、まるで襤襤雜巾のよつな無様で惨めな姿で息絶えて下さい」

「いや、違くて、」

「わかりました、私の平和のために死んで下さい」

「ぐあつ…!…!…?」

私はちょうど落ちていた鉄パイプを彼の脇腹を狙つて突き出した。至近距離からの攻撃。勿論、外れるわけが無い。見事にそれはヒットし、彼は地に崩れ落ちた。

伏さんはそれを見て鼻で笑っていた。ついでに貴方も地に崩れ落ちてくれますか。

彼は宇座威人。^{ルル}非常に不本意ながら幼稚園、小学校、中学校、

そして、今、高校と続けてきた幼馴染だ。ち

なみに伏さんとも非常に不本意ながら幼馴染である。非常に不本意ながら。

そして、非常に残念ながら、宇座さんは私たちの通う学校の生徒会役員でもある。非常に残念ながら。

「つは……、あつはつはつは……！…… も、ですが俺の妻となる女だ……！…… 過激なのも良いけど、たまには素直な、ぐはあつ……！」

「退いてもらひえますか、生ガリヨリも使えない人」

「な、生ガリ以下……だと……！……？」

「はつはつはダッセー……！」

「私の為に地に伏してくれますか」

「ぐあああああああ……！」

私は未だ手にしていた鉄パイプで思いきり伏さんの背を突いた。伏さんは見事な反りを披露し、スローで崩れ落ちた。背景に散ったように見えた薔薇の花はきっと私の幻覚だらう。

黒倒しても良いですか（後書き）

「つざこ人と不審者被害者。

接吻しても良いですか

「おはよー、やあこめす、神亀 零尾さん」

「おはよー、彼我ちゃん。今日も元気ねえ」

ゆったりとした口調にほわほわとした笑顔。癒し系の姫伊達じやない。私でも癒されてしまうのだから。

こんな無愛想な私とも仲良くしてくれて、本当に彼女はまるで聖母のように清らかで美しい柔らかな心を持つている。

「ねえ、彼我ちゃん。あれは何かしらあ?」

不思議そうな顔で彼女が指差す先にあるのは状況と併座さん（生ゴリ）。

「神亀さんが気にする価値も無いものです」

「そーお~。なら、良ければ……」

そう言しながらも気になるのか、話をじてこの最中もチラチラと

見ている神亀さん。神亀さんの視界に入るなんておこがましいにもほどがある。

「神亀さん、あんなのを気にするよりも、私と話しませんか。……
あ、そういうば、駅前で経営していたラーメン屋、知っていますか」

「えつと……、“一発屋”っていうとこなら知ってるナゾ……、
それのこと、かしらあ？」

「あそこ、潰れて、新しくクレープ屋が出来たんですよ。今度、一
緒に行きませんか」

「クレープ？ うん、行きたいわあ」

きりきりと瞳を輝かせて嬉しそうに笑う神亀さんは三十分で食べ
切れたら一万円という巨大パフェを僅か三分で食べ切ったことで有
名だ。

挨拶しても良いですか（後書き）

美人で綺麗な人と被害者。

貶しても良いですか

「なあ彼我ちゃんパツパラパーでアツパラパーなナルシストで親に悪意の籠つた名前つけられた可哀想な子知らん?」

「ナルシストは知りませんが、パツパラパーでアツパラパーで親に悪意の籠つた名前つけられた似非関西弁の可哀想な人なら今、私の目の前にいますよ」

「えー? 何処におんねん、そんな痛い奴」

「鏡を見て下れー」

「おかしいで彼我ちゃん。俺しか映つとらん」

「それが真実です」

「酷いわー、彼我ちゃん」

そう言つて、「およよよよ」と態とらしい泣き真似を私の前で恥ずかしげも無く、なんのプライドも無く晒したのは、非常に残念ながらこの学校の生徒会長、柳瀬^{うぜ}江南^{えな}先輩である。非常に残念ながら。

「どうでも良いから、とりあえず退いてくれませんか。私は先生に呼ばれているんですが」

「人のこと散々貶しといて『どうでも良い』は無いんやない？ で？ 誰先生に呼ばれどるん？」

「白羽 慧先生ですけど」

「白羽ちゃん？ アカンで、あの人はレズっ子やから。襲われてまうで」

「汚らわしい下品な妄想を語らないでくれますか」

「え、ちゅ、なんなん？ その心底軽蔑したような眼。せっかく可愛い後輩を思つて忠告したのに」

もう相手にするのも馬鹿らしい。私は柳瀬先輩の横をすり抜けようとした。
しかし、

「ちょっと……！ 待ちいや彼我ちゃんつ！」

「…………あ、…………」

不意に渴いた音を立て、掴まれた腕。交わる視線。柳瀬先輩の頬を微かに赤らんでいて、

「彼我、ちゃん……」

「柳瀬先輩……、」

柳瀬先輩は少し眼を伏せて、すぐに私と視線を合わせた。心なし
か顔がさつきよりも赤くなつてゐる気がする。

「なあ、彼我ちゃんは気付かないふりしてゐるんか？ それとも本当に氣付いてないだけ？ 僕が、本当に宇座を見つける為だけに、彼我ちゃんに会いに來てると思つとるん？」

「柳瀬先ぱ……い……、」

その瞳の力強さに、私は思わず、

「発情期ですか、気持ち悪い」

「期待させといてそれなんか？」

心に秘めていた本音をぶちまけてしまった。

肩を落とし、柳瀬先輩は深いため息を吐いた。もう用は無いだろうと判断し、私は白羽先生のもとへ向かう。

私を引き留めている声は聞こえているが、敢えて聞こえないふりをしている。柳瀬先輩は相変わらず面倒臭い人だ。

貶しても良いですか（後書き）

ウザい人と被害者。

逃げても良いですか

職員室に行けば、白羽先生は居らず、訊いてみれば、理科準備室にいると言つ。私は教えて下さった先生に礼を言い、理科準備室に向かつた。

理科準備室につき、ドアを開ければ、待ち構えていたように白羽先生が口を開いた。

「やつと来たの。遅いじゃない。何してたの」

「すみません、柳瀬先輩に絡まれていました」

「ああ……、柳瀬に。でも、だからといって、それが遅れて良い理由にはならないわ。社会に出たら、それは通用しないもの」

「はい、すみませんでした」

「わかったなら良いくわ」

切れ長の冷たい瞳。そこにそつと寄り添う泣き黒子。綺麗に纏められた茶髪。何故、教師なんて職についているのかわからないほど白羽先生は綺麗な人である。

「それで、あなたを呼んだ理由だけれど、」

「はい」

「……特に、無いのよ」

「…………は？」

意味がわからず、思わず間の抜けた声を出してしまった。なら、どうして私は呼びだされたのか。ああ、理由が無いのか。

「私があなたに会いたかった……。それだけじゃ、駄目かしり」

少し頬を染め、私の右手をとり、そつと両手で包みこむ白羽先生。
伏さんと宇座さんのせいで無駄に鋭くなつた私の危機を察知するセ
ンサーが大音量で鳴つている。

「、失礼ですが、白羽先生には人と少し違つた性癖がおありで？」

「……私、レズビアンなの」

「すみません、私、用事を思い出したのでこれで失礼します」

勿論、用事等は無いが、私は全速力で理科準備室を飛び出し、教
室へ向かつた。「また来てちょうつだい」出来れば辞退したいのです

が、
良いですか。

逃げても良いですか（後書き）

（先生としては）素晴らしい人と被害者。

注意しても良いですか

「加賀兄さん、なんですか、その奇怪な形状の布は」^{かが}

「これえ？全くもう～、これはネクタイでしょ？、ひーちゃん。相変わらずドジっ子なんだから～」

「あなたにだけは言われたくない言葉ですね」

私の視線の先にはネクタイを言葉では表現できないほど意味のわからない身につけ方をしている兄さんがいる。
きっと、このまま彼は会社へ出勤していくつもりなのだろう。仕方なく、私は兄さんのネクタイを直してあげることにした。

「…………しつかりして下さい、それでも私の兄ですか？」

「…………僕、そんなに頼りないかなあ…………」

「はい」

眉を下げるといふと小動物のような瞑らな瞳で私を見つめる兄さん。しかし、私はそれを無視して、鞄を持たせた。

「どうが。それでは、いつでいいしゃい。精々、会社の皆さんの足を引っ張らないよう、頑張って下さー」

「わかつた」

兄さんは独り立ち出来るのだろうか。脳裏に過つたそんな不安を押し込め、私はドアを開けた兄さんの背を見た。しかし、その向こうには何故か伏さんがいた。

「お嬢……！　あつー　お義兄さん……！　お嬢を下せ！」フウウツ！？」

「あれえ？ なんか蹴つちやつたような気がするー。 気のせいかなあ？」

「いやいや、お義兄さん!? オレ、此処にいますよーー!!」
全然氣のせいじゃないからねーー!!

「あれえ？ 幻聴まで聞いじゃねー。ひーちゃん、やつぱり僕、休もうかなあ」

「一人で変なことしてないで早く会社に行つて下さい」

「えええええお嬢までオレの存在無視！？」

「はあい、行つてきまおす」

「ガハアツ！！ ちょ、これ、わざと…？ わざとだよね…？」

今日も何故か外が騒がしい。私は外の騒音を聞こえないふりをして、読みかけの本を読みに行つた。

注意しても良いですか（後書き）

不審者と加害者と被害者。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3303z/>

短編集

2011年12月29日21時47分発行